

守っているのは、 農地だけじゃない。



ずっとこの地で農地を守る――。

農地は人の営みを感じる

私たちがこれまで当たり前のよう
に見てきたこの町の風景。それは
決して山や川、海といった豊かな自
然だけではありません。それらのす
ぐそばには、大小さまざまな農地が
広がっています。

農地は単なる自然ではなく、人の
手が加わることで維持され、そして
恵みを生み出しています。春になれば
種をまき、夏には何度も草を刈
り、そして迎える恵みの秋。

この町の農地は、代々この地で土

を耕してきた農家の皆さんによって
守られてきたのです。

耕し続ける手が、農地を守る

高齢化が進む今、後継者のいな
い農地は増える一方です。それでも
なお、「この景色を絶やしたくない」
と、今日も田畑に向かう農家の姿
を皆さんも目にすることがあるで
しょう。

私たちの町の「ふるさとの原風景」
は、そんな農家の皆さんによって守ら
れてきたのです。

40年夫婦で守ってきた急斜面のゆず畑



いちょうはら ひさお
井長原 久雄 さん



いつこ
怡都子 さん(地吉)

めっそう無理はでせんが、この先もやらないかんわいね

「こんな山でゆずを作る人はおらんぞ」と笑うのは、地吉地区でゆず栽培する井長原久雄・怡都子さんご夫妻。今から40年前、愛媛県でみかん栽培を見た久雄さんが「これならうちの勾配のきつい所でもできるかもしれん」と、山の斜面を切り開き約1,000本のゆずの苗木を植えたのが始まり。

80歳を過ぎた今でもお二人は、超急勾配のゆず畑で作業。「ここは収穫の時に脚立も使えんぞ。やれるもんが守っていかなのう」と久雄さん。今年もお二人の愛情いっぱいのゆずが収穫期を迎えます。

地域で助け合い農地を守る。

減る農家と地域の支え合い

長年、慣れ親しんだ田畑を前に「もうやめるしかないのか」と思い悩む農家も少なくないでしょう。体力の限界を迎え、農地を手放す決断に迫られる方も。また農業への意欲があっても、コンバインなど農機具は高額で、個人では買い替えが難しく、効率化や経営面を理由に農業を継続できない方もいるでしょう。

農家の減少は、地域農業の維持・発展を困難にしています。

そんな状況の中で誕生したのが、地域の「絆」を力に変える「集落営農組織」です。

この谷の農地は荒らさない



松生原営農組合
とよしげ 山崎 豊繁 さん
たてよ 山脇 健世 さん

「農地を守って」という願い、かなえたい

「今まで耕作してきた土地が、草ぼうぼうになるのは忍びない。この谷の人はみんな思いゆう」と話すのは松生原営農組合、代表の山脇健世さん。

平成13年度に組合を設立、現在7名の役員で地域の農地を守っています。

この日、稲刈りをしていたのは山脇さんとメンバー最年長の山崎豊繁さん。「農地を守ってほしいという願いがある限り、私たちができる間はかなえたい」と山崎さん。「やれるうちは守っちゃらないかん」と額から汗を流し山脇さんも語ってくれました。

「荒らさない」想いで守る

集落内の農家が協力し、農業生産の効率化・経営の安定化を図る集落営農組織。町内には現在80の組織が存在しています。

「この土地を荒らしたくない」という共通の想いのもと、集落単位で農作業や機械を共同化し、地域農業を維持しています。

一人では不可能だった農作業が可能となり、耕作するか悩んでいた農地も、地域で管理できるようになりました。



今年も実りの秋を迎え、米・ショウガ・栗・シイタケなど四万十町の直販所は豊かな恵みにあふれています。この食の豊かさや美しいふるさとの原風景は、「農地」があってこそのもので。

しかし今、農家の高齢化や後継者不足などによって、大切な農地が失われつつあります。耕作放棄地をできるだけ増やさないために、時代の変化とともに農地の守り方も変わっています。農地を守るとは、私たちの食やふるさとの風景、そして子どもたちの未来の暮らしを守ることにもつながります。

今回はそんなかけがえのない「農地」という財産を、守り続ける人々に迫ります。

高齢化と後継者不足が招く耕作放棄地

現在、この町では約65 haの農地が耕作放棄地となっています。農家が減り、耕作放棄地が増えると、私たちが慣れた美しい田畑の景観は失われ、イノシシやシカの鳥獣被害も拡大します。いったん耕作放棄地となると、元の状態に戻すには相当な労力と費用が必要です。

日本のふるさとが抱えるこの大きな課題に対し、「農地を守る」という同じ想いの中で、さまざまなかたちで生まれています。

農地を守る町の多様な力

町の農地や美しい景観をこれまで守り抜いてきた「農家さん」。体力の限界などにより耕作が難しくなると、地域では農家が協力し合い、機械や作業を共同化する「集落営農組織」が誕生しました。

また農業委員会も農地パトロールを行うなど、農地の利用維持を促しています。

しかし、深刻化する後継者不足により、集落営農組織が限界を迎えつつある地域も…。

そこで誕生した「中山間農業複合経営拠点組織」。厳しくなった地域農業を、集落営農組織同士の連携や広域での大規模運営など、多様な力で守ろうとしています。

地域農業の取材を進める中で、昨年冬の母の言葉をふと思い出しました。「お父さんにも負担が掛かるき、来年は少し支援センターにお願いするでー」。今思うと、その言葉の裏には農家の高齢化や農業資材の高騰、農産物の価格低迷など地域農業が抱える課題が詰まっていたように感じます。